

第 11 回 今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者会議について

2024 年 4 月 26 日に今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者会議が開催された。

10:00 から 12:00 までの予定で行われた。対面での傍聴者は認められず、ライブ配信での中継となった。140 人前後の人が視聴していた。

今回の議題は以下の通りである。

1. 学習評価の在り方について
2. その他

対面と WEB 会議を組み合わせた方式で行われ、文科省の会議室からは天笠座長、秋田委員、高橋委員が参加し、その他の委員はネット経由で参加した。富士原委員、戸ヶ崎委員は欠席のようだった。

会議に先立ち、4 月 1 日付で着任した文科省の森大臣官房審議官、武藤教育課程課長、栗山教育課程企画室長の 3 名から挨拶があった。

初めに、事務局から資料 1 について説明があった。

これまでの議論で出てきた課題から、本日は「学習評価の在り方」をテーマとする。そこで、現行の学習評価についての概要を説明した。

今回は、京都大学で教育方法を専門とする西岡教授から発表をしてもらい、その後、委員との意見交換を行う。

10:15 頃より、西岡氏が「学習評価の在り方からカリキュラム改善を考える」というテーマで発表を行い、次の 4 点について考えを述べた。

1. 教育課程の領域の整理と役割分担の明確化
2. パフォーマンス評価の活用の推進
3. 教科における成績づけ（評定）の在り方
4. カリキュラムと評価の改善を促進する仕組みの構築

そして、この中で「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の 3 観点で評価が行われていることについて、「教科学習」と「総合学習や特別活動」においてはその比重を分けて考えるべきだったと述べ、さらに「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」については統合すべきだという持論を述べた。

10:50 頃より、質疑応答を行った。

高橋委員：文科省からは目標準拠型評価が提示されている中で、ポートフォリオやルーブリックがあり、それぞれの関係や使い分けはどうすればよいか。この10年間で評価の具体的方法は進化したのか。

西岡氏：目標準拠評価と個人内評価を内在的に結束させながら進めるべき。両方ともあらゆる領域で必要。この20年間同じことを言い続けているが、徐々に広がってきたと感じる。デジタルツールの活用は今後の課題だと考える。

秋田委員：これまではカリキュラムに付け足す形で評価が考えられてきたが、今回はカリキュラムと評価を相互に考えていることがよい。3つの観点のうち2つを統合するという提案については、どうかと思う。また、重要なポートフォリオのポイントを示されたが、定期的な検討会など組み込む時間をどう作ればよいのか。

天笠座長：義務教育から、高等学校、大学入試、大学へ、評価に学校段階ごとの特徴があるのか全体のつながりなのか意見を聞きたい。

市川委員：「学びに向かう力」と「主体的に取り組む態度」はほぼ対応関係にあるが、一般の教育界では混乱している。「学びの活かし方」と「学びの進め方」という2つの解釈があるため、この関係を整理すべき。また、2観点の統合という提案について、これまでの議論では「統合すべきではない」という意見が多かった。関連はしているが同一ではないので、区別した方がよい。

西岡氏：「態度」と「思考・判断・表現」はどこで切り分けるのか。わざわざ切り離すべきではない。ポートフォリオの検討会については、学期に1回でよい。

奈須委員：一度なくなった「単元」という概念が復活したが、具体化が進んでいない。目標準拠評価を基準にすると、目標ばかりで多様な子供の姿を逃すという批判がある。だから個人内評価を組み合わせる。「目標にとらわれない評価」もあり、言葉や概念の整理が必要。「態度」についてはこれから議論が必要だと考える。意欲は育成するが評価するものではないという意見もある。「態度」の部分は領域特殊なのか汎用なのか。また、業者の単元テストに現場が依存している面があるが、授業とは関係なく作られており、妥当性があるのかも疑問。

石井委員：評価概念が多義的すぎて、現場も混乱している。情意領域は目標に掲げてもよいが、成績づけは望ましくないといっている。十分に議論が必要。「学びに向かう力」は何に向かうのか、学習なのか、人生なのか、教科なのか整理すべき。現在は一時間の授業単位の目標構造になっているが、少なくとも単元ごとにすべき。

天笠座長：授業改善のための評価として、カリキュラムマネジメントにおける条件整備的な視点も検討する必要がある。

貞広委員：教育の条件整備を専門としている。教育委員会のサポートの有無で教育の改善が全く変わってくる。どういう条件がカリキュラムの改善に重要かアイデアを聞きたい。

荒瀬委員：大変勉強になった。

西岡氏：条件整備については地域間格差が広がっていることを心配している。一番のリソ

ースは学校の先生である。小学校英語やタブレット端末活用など、新しいことがたくさん導入されたのに先生が足りていないところが多い。日常的にやる授業改善の評価と学校のカリキュラム改善の評価は分ける必要がある。「個人内評価」と「目標にとらわれない評価」は違う。整理しながらやっていくべき。意欲は評定すべきではないと考える。学校段階ごとの違いについては基本は同じだと考える。

欠席の戸ヶ崎委員は、後日意見を提出し議事録に掲載される予定であるそうだ。次回の予定については、日程調整ののち連絡することとなった。